

「如来蔵思想の形成」

— インド大乘佛教思想研究 —

小川 一 乘

インド大乘佛教における如来蔵（佛性）思想に対する研究は、学界周知の如く、一九五〇年に宝性論のサンスクリット校定本 *Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantrasāstra* が E. H. Johnston によって出版されて以来、幾多の研究成果としてわれわれに与えられている。それらについては、いまさらここに関説するまでもないであろうが、その研究成果によって、如来蔵（佛性）思想は、宝性論においてその思想が体系的に大成されたという見解が、インド佛教研究の立場から現今の学界における定説とされている。すなわち、宝性論において体系的に表明されている思想をもって如来蔵（佛性）思想と設定することが定着したということである。

ところで、その如来蔵（佛性）思想は、宝性論の註釈者ダルマリンチェンによれば、大乘佛教の根幹である般若空観思想を發展展開せしめた所謂「無の有・無宗の宗」として、空観思想の真の方便分であるとされ、また、チベットの伝承による弥勒の五部論における *uttara-tantra* としての第五論、すなわち、

二分別（法法性分別論と中辺分別論）から二莊嚴（大乘莊嚴經論と現觀莊嚴論）へという順序をふまえた大乘佛教の究竟論（*uttara-tantra*・最上なる要義）とされている。般若空観思想を最も正当に具体化したのが、その方便分としての如来蔵（佛性）思想・宝性論であるというこのダルマリンチェンの見解から、必然的にかれの註釈書では唯識思想の見解に対する批判も重要な課題とされている。従って、そこには、空観思想の真の方便分として展開した如来蔵（佛性）思想を、唯識思想に対する批判を踏えつつ説明しようとする姿勢が明瞭に示されている。もとよりこれは、十四～五世紀に在世したダルマリンチェンというチベットの学僧の佛教観に基いたものであるが、かれの立場は、佛教に佛（覺者）から人間（凡夫）へとという下向的な還相面と、人間から佛へとという上向的な往相面との二面があるとすれば、その前者に重点が置かれていたということであろう。人間の心の分析を通して迷いから悟りへと上向的に転識得智していく唯識的なあり方に対して、佛から示された難知難見の悉有佛性（本性清淨）という事実をひたすら敬信し讃嘆していくあり方に、究竟的な佛教の態を見ていたということであろう。そしてこれは、インド大乘佛教が思想化された初期から中期において、中観から唯識へとという展開の中で両者が相対するも、後期に至るとそれら両者の融合がはかられ、結局のところ空観的なあり方が優位を占める中で「光明に輝く本性（心性）・本性清淨」ということが強調されるに至った、ということが思想史的な経過であるとすれば、単なるダルマリンチェン個人の佛

教観ではなく、そのような歴史的な背景に基いたものともいえるであろう。

さて、本書「如来藏思想の形成」は、序論「如来藏思想の定義」(一～三六頁)、第一篇「如来藏思想の形成」(三七～三六六頁)、第二篇「如来藏思想前史」(三六七～七四二頁)、結論「如来藏思想形成史」(七四三～七九頁)から成り、それに索引、文献目録などが一〇六頁にわたって附され、都合九百頁にも及ぶ大著である。また、本書の著作目的は、「『宝性論』に至る(如来藏思想)の形成の過程にあつたと思われる諸資料を全面的に、出来る限り精査してみようとするものである」と著者自らが述べていることよって明示されている。

本書の内容を概観すると、まず序論では、第一に「(如来藏思想)とは」何か、という根本問題から始まっている。如来藏(佛性)思想は、中国↓日本の佛教において種々に問題とされてきた関係上、インド佛教史から見れば、変形され改作された形で大乘佛教の重要な思想として定着しているのであるが、本書では、従来の諸々の研究成果に基いて、「如来藏思想」とは『宝性論』がその目的をもって書かれたところの所釈の教理内容をさす名である」と定義することをもって、さし当てる作業仮設としている。この定義は、インド佛教の立場からは現段階においてきわめて妥当といわなければならない。

第二に「本研究の目的、方法、範囲」として、検討の対象と

なった文献資料の取り扱い方が、次のように説明されている。すなわち文献を、

一、宝性論所引の如来藏を説く経論、

二、宝性論に引かれてはいないが、如来藏思想が説かれている経論、

三、如来藏思想の形成に重要な役割を果たしたと思われる経論、という三グループに区別し、第一と第二とに対する精査をもって第一篇とし、第三に対する精査をもって第二篇としていること、さらに、今回の検討においては唯識説との交流を前提とする経論については、今後の課題として研究対象の範囲から除いていること、などが述べられている。

第三に「(如来藏説)の基本構造」として、宝性論の基本構造を略説する中で、如来藏説に関する諸概念を摘出し、その概要を述べている。

以上が序論の概略であるが、第三において宝性論の概要が述べられている中で、宝性論が、如来の法身と真如と種姓という三義に基いて「一切衆生悉有如来藏(sarvasattvas tathagata-sarvabuddha)」という句を分析している点(本書二一頁)について、第一の「衆生は如来藏である」と第三の「衆生の蔵は如来性である」という解釈は思想的に同一内容と見なされるが、第二の「衆生の蔵は如来である」という解釈は思想的にそれらと相異している注意すべきものである。そのサンスキット文は、まさしく「かれら衆生たちの蔵(sarvabuddha)は如来にして、真如であ

る」と読まれるべきであるが、ここに注意したいのは、そのチベット訳では de bshin gségs pañi de bshin rid sems can de dag gi shin po (如来の真如がから衆生たちの蔵である)と訳出されている点である。すなわち、如来と真如(蔵)の結合関係がサンスクリットでは karmadhāraya に読まれ、チベット訳では tatpuruṣa に読まれていることの相異である。この場合に考えられることは、チベット訳の誤訳(或は意図的な改訳)であるか、チベット訳の所依となったサンスクリット原本では現存のテキストの如く tathāgatatahātāh (或は tathāgatasya tathātāh) とあつたか、のいずれかであろうということである。いまこのような梵蔵の相異に注意しておきたいのは、宝性論において「衆生の蔵が如来である」といわれ「如来の真如である」といわれていないことにその思想的内容からして少しく疑念が残るからである。これは、宝性論の註釈者ダルマリンチェンの見解に従いすぎているということかも知れぬが、ともあれ如来蔵系の経典において「衆生の蔵が如来である」と説かれていた場合は不問にするとして、その如来蔵説を思想的に体系化して論述している論書(sāstra)としての宝性論においてそれが説かれていた場合は、論全体の思想性から検討を要するのではなからうか。ダルマリンチェンが「衆生の蔵として衆生に内在しているのは、法性であつて法身ではない、すなわち、真如であつて如来ではない」如来蔵は因位的に理解すべきであつて果位的に理解するのは宝性論の本意でない」等々と強調している点に留意した

い。いうまでもなく、如来蔵とは、諸法の法性を有的に表現したものであり、あたかも唯識説の三性説における依他起性にも相当すべきものであるといえよう。従つて、それは、勝義(法身)と世俗(衆生)との基底において差別なく、それ故に、法身と衆生との即一性平等性が可能なのであろう。如来蔵があるが故に、法身(法界)と衆生界とは一界でありうるのである。あたかも依他起性があるが故に、遍計所執性が円成実性として転識得智しうることにも対比されるといえよう。要は、如来の真如としての諸法の法性が、原始経典においては縁起と表現され、中観説では空性と表現され、唯識説では依他起性と表現され、如来蔵説では佛性と表現されていることのそれぞれの表現の意図が尊重されなければならない。その意味で、法性(dharmata)を佛性(Buddha-dhātu)と表現したその意図を尊重するとき、宝性論において「dharma の義は Hetu (因) の義である」と解釈されていることは重要であり、その因(Hetu)とは何か、といわれれば、諸法の法性であり、それが、如来の法身の遍満性、如来の真如の平等性、如来の種性の有性として説明されるという図式となるのであろう。

二

第一篇「如来蔵思想の形成」は四章から成るが、第一章「如来蔵系経典の三部経」は、宝性論がその如来蔵説の論説に當つて最も重用した「如来蔵経」「不増不减経」と「勝鬘経」とに對する検討である。

第一節「如来藏經」では、第一には「宝性論がその如来藏説を展開するに当つての最も基本的な典故として用いられた經典」が如来藏經であるとされ、その内容が具体的に示され、第二には、この經の主題と内容が概観され、続いて、如来藏經の主眼点を説示する意味において、第三には、如来藏經に説かれる九喻において如来藏としての衆生の内なる法性がどのような用語で表現されているかの種々の用例が枚挙され、第四には、如来藏經に基づきつつ如来藏の藏 (garbha) の意味とその先行思想とについて闡説され、第五には、如来藏經において garbha と並んで大事な役を果している nidhi (宝藏) という用例が「法藏 dharmadhī」としての如来藏」として検討され、第六には、煩惱に蔽われている如来に等しい法性の開發が、衆生↓菩薩↓如来という次第で行なわれていくことが經中に指示されている用例を示し、最後に第七には、如来藏經は、内なる法性の存在を証明することに主力を注ぎ、垢(煩惱)の浄化という点を、後続の二經に托したという結びを与えている。

第二節「不増不減經」では、第一には、不増不減經と宝性論との関係が示され、第二には、不増不減經の内容が概観され、続いて、如来と衆生界とは一界であつて増減なきことを説く本經の主眼点が、第三には衆生と衆生界として、第四には衆生界の三特質の中の第一と第二である「相応」と「不相応」として、第五には衆生界の第三特質として検討される中で、特に界 (bhūmi) の意義などが説明されている。終りに第六には、本經における衆生界三種法の部分が和訳されている。

第三節「勝鬘經」では、第一には、著名な勝鬘經の内容概観を試みることは不要であることを断わり、第二には、如来藏の説示を中心とした勝鬘經の内容を概観している。第三には、勝鬘經が不増不減經の思想をより明確に發展展開したものである点を、両經の内容を比較対照することによって分析的に説明し、第四には、勝鬘經の如来藏思想上の地位を論じ、本經が如来藏思想をもつて究竟一乘思想の基本としたことにより大乘佛教中における如来藏説の地位を確立したことを指摘している。

第二章「如来藏と佛性」は、前章の三部經には使用されていない「佛性 (buddha-dhātu)」という語を使用している涅槃經の系統の一群の經典——「涅槃經」「央掘魔羅經」「大法鼓經」「大薩遮尼乾子所説經」——に対する検討である。

第一節「涅槃經」では、第一には、著名な涅槃經の各種の文献を紹介し、第二には、涅槃經の主題である如来常住説が如来藏説を主張するための導入の役割をはたしている点を論じている。続いて、涅槃經における如来藏説示としての如来性品第十三を中心に、第三には、第十三品に至るまでの前十二品における tathāgata-garbha と dhātu との用語例を検討し、第四には、如来性品第十三の如来藏説を用例に即しつつ論じ、第五には、文字品第十四以下における如来藏説に関する目ぼしい用例を検討し、もとより一闡提論にも闡説している。第六には、この經における如来法身と如来藏との関係を如来常住と四波羅蜜とに関する用例において検討し、最後に第七には、涅槃經の如来藏思想における地位を論じ、如来藏 (tathāgata-garbha) を

佛性 (Puddha-dhatu) と換言して、如来藏説を抽象化した点を評価し、「佛性」という語は涅槃經の創造であるとしている。

第二節「央掘魔羅經」では、第一には、かの有名なアングリマーラ(指鬘外道)の物語を語る本經の内容を概観し、第二には、本經に見出される如来藏説の概要を紹介し、第三には、本經における「如来藏説の意義」と題して、央掘魔羅經における如来藏説示の用例を通覧し、第四には、その特色を界 (Grenz) と「密意」||如来秘密藏との二点で検討し、最後に第五には、本經の位置を論じ、涅槃經↓央掘魔羅經↓入楞伽經という関係の上でその系譜を見ている。

第三節「大法鼓經」では、第一には、大法鼓經の内容が概観され、第二には、本經における隠覆の説としての如来藏説を真我としての如来藏として捉え、第三には、その如来藏説が極めて率直な徹底した一乗説の上で説かれていることを特色として挙げ、最後に第四には、本經の位置を涅槃經や央掘魔羅經との関係の上で論じているが結論を出すには到っていない。

第四節「大薩遮尼乾子所説經」では、第一には、本經の内容が概観され、「薩遮尼乾子經と菩薩行方便境界神變經」との関係が論じられ、第二には、その如来藏説が總じて因中有果論的な色彩の強いものであり、如来藏經↓涅槃經↓大法鼓經、央掘魔羅經の延長線上のもので特に加えるところのないものであることを用例をもって示している。最後に第三には、本經の一乗章第四をチベット訳に基いて和訳し、その一乗説の特色を法華經や勝鬘經、大法鼓經、或は般若經等への言及の中で論じてい

る。

第三章「如来藏と種姓」は、種姓 (Gotra) の概念を重視する中で如来藏を説く「大雲經」「大乘十法經」に対する検討である。

第一節「大雲經」では、第一には、大雲經の漢訳とチベット訳との相異についての問題点が指摘され、第二には、チベット訳に基いた本經の内容が概観され、第三には、本經の如来藏説が、A 如来藏、B 如来種姓、C 不断佛種、D 常住不變の法性、という観点から説かれていることを、それらの用例を抽出する中で挙げている。最後に第四には、本經の位置が論じられ、不増不減經↓大雲經↓涅槃經という仮設の下で、涅槃經に帰せられている如来常住説の創始をこの大雲經の上に見ようとしていることが注意される。

第二節「大乘十法經」では、第一には、大乘十法經に見出される唯一回の「如来藏」の用例を挙げ、第二には、それが本經全体にとってどのような地位を占めるかに留意しつつ住種姓菩薩所修の十法を中心に本經の内容を順次に概観し、第三には、本經の位置を論じ如来藏系經典のうちでは最後に位置するものであるとしている。

第四章「如来藏とアラーヤ識」は、大乘莊嚴經論が宝性論に引かれている点や、瑜伽論が宝性論と関連していると考えられる点などから、如来藏説と唯識説との関係を明らかにする上で、唯識説関係の諸々の典籍が検討の対象とされなければならない時期に到っていることに関する一章である。

第一節「概観」では、如来藏説と唯識説との交流を明らかにするための唯識説の諸文献に対する検討は、次の課題として本書では省かれていることから、その展望を概観するに止め、附論として、唯識説を受け入れた經典で、しかも如来藏にも言及している「金光明經」と、如来藏説を説く「勝鬘經」と唯識説との関係とを、次下の二節で検討している。

第二節「金光明經・分別三身品」では、第一には、金光明經における如来藏説といっても、如来藏の語に言及されているのは、經の發展増広の過程における挿入部分の一部である分別三身品においてわずかに一回あるだけであり、従って、本經に如来藏説が挿入されたことの意味を追求し、それが如来藏説の發展の中でどの段階のものであるか、という観点からその箇所を検討し、第二には、金光明經の佛身説＝三身説を論じ、第三には、法身を中心に汚れの浄化の問題を修道論として論じ、最後に第四には、この分別三身品の作者が唯識説に通じ宝性論をも知っていたであろうと推定して結んでいる。

第三節「勝鬘經と唯識思想」では、第一には、本經が唯識説と無縁であっても、唯識思想の形成に何らかの役割を持ったのではないかという問題提起をなし、第二以下で勝鬘經の中に見出される特色ある諸点を検討している。すなわち、第二では無始時來界の偈を、第三では心法智を、第四では自性清淨心と刹那滅を、第五では無明住地を、それぞれ検討し、唯識思想が形成されていくための何らかの役割をそれらの上に設定している。第六の「結び」では、勝鬘經が説いている如来藏の染淨依持は

不完全であり、アーラヤ識説の導入なしには完結しないものと論じている。

第二篇「如来藏思想前史」は四章から成るが、第一章「如来藏思想の二源泉」は、如来藏思想の形成に重要な役割をはたしたと見られる經典として、まず宝性論に經名だけが挙げられている「般若經」「法華經」を検討の対象としている。

第一節「般若經」では、第一には、宝性論に二回の挙名が見られる般若經に対する検討をふまえ、如来藏説(宝性論)が般若經を乗り越えようとしているという兩者の関係を明示すると共に、隨生(anurājan)とその理由としての真如の無差別とをめぐって般若經と如来藏説との関係を検討する必要を明らかにしている。その意味でまず、第二には、宝性論が対象としている般若經が二万五千頌であったとして差支えない文献上の問題を検討し、その上で隨生と真如との問題に関して、第三には「如来と真如」と題して般若經における真如に関する用例を、第四には「法性、法界、法身」の用例を検討しているが、その中で「法身」という術語が般若經の中に固定していないことを指摘しているのが注意される。さらに第五には、この隨生の問題について、三乗と種姓とに関する用例を検討し、第六には、原始經典以来の「自性清淨心」について般若經中の用例をその類似表現をも含めて列挙し、それが「畢竟空・離」と説明されていることを明かし、それが後続の大乗諸經典の基本線となってきたとしている。

第二節「法華經」では、第一には、宝性論に唯一回の拳名がある法華經についてそれに関連する用例を法華經中から挙げ、第二には、法華經が如来藏思想とどのように結びつくかを「法華經論」の内容を概観する中で検討し、そこにおいて如来藏思想が法華經の一乘思想の帰結を示すものと理解されていた点を見出し、第三には、法華經論の検討に基いて、法華經と如来藏説との直接的な関連を探り、法華經思想を代表する諸用例を列举する中で法華經の一乘説が二乘廻心的（二乗方便的）なより徹底した一乘説であることを指摘している。

第二章「菩薩と如来種姓（Ⅰ）」は、大乘菩薩道の内包する一つの重要概念であると同時に如来藏思想形成の重要な一要素である種姓（gotra）の問題について、「宝積經・迦葉品」「維摩經」に対する検討である。

第一節「宝積經・迦葉品」では、第一には、迦葉品の内容を概観し、そこに見出される当面の主題に関わる二点を、第二に「佛子としての菩薩」とし、第三に「聖種姓―心の清浄性」として、多くの用例をもって検討している。最後に第四には「その他の諸概念」として、迦葉品において如来藏説と関連のある諸用例を、「四顛倒と四法印」「客塵煩惱」「本性清浄」「不淨中に墮した宝石」として簡単に検討している。

第二節「維摩經」では、第一には、維摩經が宝性論には直接的に言及されていないとはいえ、維摩經に「如来種姓品」という一品のあることから、それを検討の対象としたことを述べ、第二には、如来種姓品における如来種姓の問題を、「菩薩の道」

「如来の種姓（家系）」「菩薩の家族」の諸点に関する用例の中で検討し、第三には「その他の諸概念」を、「自性清浄心と本性清浄」「法身、法界、真如」の上で検討している。最後に第四には、「如来種姓（gotra）」の語が維摩經には見出されるが、般若經や宝積經（迦葉品）には見出されない点を問題とし、如来種姓という語を度々使用する華嚴經（次章で検討）とその類似性が指摘されている「首楞嚴三昧經」を検討し、この經が如来藏思想の一淵源として重視されなければならないと結んでいる。

第三章「菩薩と如来種姓（Ⅱ）」は、如来種姓の語をよく使用して如来藏説の形成に重要な役割をはたしたと考えられる「華嚴經」、すなわちその「入法界品」「十地經」「性起經」に対する検討である。

第一節「入法界品」では、第一には、この著名な入法界品に対する概略を述べ、第二には、入法界品における「生如来家」を如来藏説に関する重要な観念としてその用例を詳しく列举し、第三には、これらの用例から、入法界品における「種姓論の特色」とそれによる入法界品の位置を論じ、それが如来藏説形成において、特に「如来藏」という語の採用に際して最も大きな影響を与えたものであると結んでいる。

第二節「十地經」では、第一には、宝性論と十地經との間接的な関連を用例をもって明かし、第二には、十地經における十地と種姓との関連性を検討し、十地經において如来藏説に発展するような種姓論はないと断言するに至る内容を論じ、第三に

は、十地経において如来蔵説と関連しそうな点を「法界と唯心」と題して論じ、次節に検討する性起経こそが、華嚴経における如来蔵説の最も重要な部分であることを述べている。

第三節「性起経」では、第一には、宝性論と性起経との関係を明かしつつ、性起経なしでは如来蔵説の成立しえなかったことを論じ、第二では、性起経における「如来出現」の意味を検討し、続いて性起経における重要な概念としての「如来種姓」を第三に、「如来秘密」を第四に、それぞれの用例をもって検討している。

第四章「法身と如来業」は、「如来蔵」の語が用いられていないが、宝性論において重要視されていたと見なされる「智光明莊嚴経」「陀羅尼自在王経」を含む「大集経」に対する検討である。

一 第一節「智光明莊嚴経」では、第一には、この経のビブリオグラフィを簡単に述べ、第二には、本経の内容を概観し、その教理上の主要点を、第三に「不生不滅の法門——九喻」、第四に「菩提即大悲——特に菩提の十六相について——」として、それらの具体例を検討し、第五には、この経における如来蔵説を論じ、この経が如来業に重点において、性起経を直線的に利用している点を論じの中で、如来蔵経↓智光明莊嚴経↓不増不減経という過程を予想している。

第二節「陀羅尼自在王経」では、第一には、宝性論がこの経を重視し、宝性論の大綱がこの経に基いていることを明かし、第二には、本経の「大綱と分段」を概観し、続いて本経と宝性

論とを関係づけている如来業の総括の一節を「如来業と衆生」として第三に紹介し、本経における如来蔵説を明らかにする意味で「自性清浄心」に関する箇所を第四に、「界 (gate)」に関する箇所を第五に挙げている。最後に第六には、「本経の位置と大集経」と題して論じの中で、本経が如来蔵経以前、もしくは殆んど同時期の成立であろうことを推定している。

第三節「大集経の諸品」では、第一には、大集経の構成内容を概観し、前節で検討した陀羅尼自在王経を含む九品を成立の古いものとしてまとめ、第二には、陀羅尼自在王経を除く残りの八古品(宝女所問経、海慧所問経、虚空蔵所問経、宝髻所問経、無尽意所説経、不胸菩薩品、無言菩薩品、不可説菩薩品)の内容を概観し、第三には、それらの諸品の内容を「自性清浄心」として一括して諸用例を検討し、第四には「その他の諸概念」として「種姓と乗」「法界と衆生界」「法身と如来出現」の諸点を検討している。

以上に概観した第一篇と第二篇とが本書における本論である。この本論では、如来蔵説に直接間接に関係があると見なされる経論(但し唯識説関係の典籍は除かれる)を宝性論を規準として取りあげ、それらを精査した、いわば如来蔵説に関する詳細な佛典解題辞典という体裁を取っている。内容的に一貫しているのは、取りあげた文献の内容をまず概観し、続いて如来蔵説に関係深いと思われる用語例を精査し網羅するという方法である。従って、きわめて膨大な分量となっているのはやむを得な

いことであろう。しかし、精査したすべてを列挙し網羅したかの観があり、時には取捨選択や切り捨ての必要を感じた箇所もないではない。また用例の挙げ方も必ずしも統一されていないが、これほどの大著ともなればやむを得ないのであろう。

本論の中で提示されている種々の問題について注目すべき点は多々あるが、いまは二、三の点について注目したい。

第一は、「佛性」の原語が dhātu である関係から、この dhātu に対する検討が各所でなされているのが注意される。dhātu という語には語意が多く取り扱いにくい語であり、漢訳でもチベット訳でも、言葉に応じて訳語が異なっていることは周知の通りであるが、たとえば、この dhātu が使われている「衆生界 (sattva-dhātu)」について、佛性思想の上から、衆生界とは「衆生の因」ということで、この界は「法性」のことであると著者の指摘などに注目したい。

第二は、般若経を精査した結果、般若経には「法身」という術語が、主語的に取り扱われていず、いまだ固定していないとされていることが注意される。佛身論の上で興味ある事実といえよう。

第三は、勝鬘経に対する検討の結果、染淨依持の如来蔵説は不完全であり、そこにアーヤ識説の導入が必然的に必要とされる、という著者の見解が示されていることが注意される。これは著者の持論の一つであろうが、そこには、本書の「結論」においても主張されているであろう如く、中観↓如来蔵↓唯識という思想の展開が見込まれていることはいうまでもない。

三

結論「如来蔵思想形成史」は、上巻の精査によって明らかにされた結果に基いて、如来蔵思想の思想形成史を総括したものである。

一「如来蔵系經典の訳経史」では、従来からの漢訳々経史から知られる関連諸經典の成立順序と特色を概観し、その結果として、訳経史から見た如来蔵思想の変遷は、五世紀に如来蔵系經典群の成立↓六〜七世紀中葉に唯識説との交渉と論典による組織化↓七世紀中葉以降の密教との結合、というのがほぼ当を得ているのであろうとしている。尚、附表として「如来蔵説に関連する漢訳経論の一覧」表が附されている。

二「如来蔵」をめぐる諸概念の展開史」では、如来蔵思想の素材となった諸概念、すなわち、(1) gotra (種姓)、(2) 自性清淨心 (citta)、(3) 界 (dhātu) — 法界、衆生界、佛性、(4) 如来と法身、(5) 如来蔵、(6) 秘密・密語・究竟論 — 如来蔵説の位置、などの展開の跡を略説している。附表として、「如来蔵説関係諸概念展開表」が附され、「如来蔵系経論系統図」(七六九頁)も挿入されている。

三「残された問題」では、本書が經典を主とした初期の如来蔵思想形成史の研究に終っていることから、次に、唯識思想との交渉を含む如来蔵思想の展開史という第二期が問題となってくることを予告している。そこには、唯識説の影響の下における如来蔵思想の動向、チベットにおける如来蔵思想の展開、中

国佛教における如来藏思想の展開、密教との関連性、等々の問題が指摘されている。

著者による如来藏思想の展開史の概観によれば、如来藏思想が唯識説の理論を導入して学説を組織化したことにより、唯識説の付属的学説の位置におかれ、やがて唯識説に吸収されてしまう。そして長い隠没の時代を経て、現観莊嚴論が後期インド佛教においてクローズ・アップされる時期に、それと共に宝性論の伝承が復活し、如来藏思想がもう一度ふりかえられることになる、という。ともあれ、こうした如来藏思想の展開の歴史を解明するためには、本書の研究に続いての第二期如来藏思想展開史の研究が「残された問題」として待っている。

以上、本書の内容を概観したのであるが、ここにあらためて、本書の価値を列挙すれば、次のことがいえるであろう。

第一に、本書は、如来藏思想が宝性論において体系化されるに至るまでの「如来藏思想の形成」についての文献学的研究である。これは、宝性論以降の如来藏思想解釈の展開の跡をチャット文献を駆使して克明に辿った D. S. Rungg: *La Théorie du Tathāgatagarbha et du goṭra* (Paris, 1969) と並ぶ世界的名著であり、これら二著作によって、如来藏思想に関する文

献学的研究は、残された問題があるとはいえ、現段階において一応の大成を見たといえる。

第二に、本書は、すでに述べた如く、梵藏漢に亘る膨大な数にのぼる典籍を長い歳月を経て精査した労作であり、今後の如来藏思想に関する各方面からの研究にとって、如来藏思想に関する詳細な佛典解題辞典として研究者座右の書となつて、その学界にもたらず貢献度はきわめて大きい。

第三に、従来、如来藏（佛性）思想は、中国↓日本の佛教界の長い伝統の中で主流的な位置を占め、独自の展開をしてきている思想であるが、宝性論に対する研究を機縁としてインド↓チベットの佛教も含む佛教全体の上で再検討されている現今にあって、本書が如来藏思想形成の根拠を文献的に精査し網羅し明確にしたことの功績は賞えられるべきであろう。

最後に、本書に対して、日本学士院から恩賜賞が贈られたことを記録し、著者の学績をたたえたい。

(A5版、本文七八〇頁、索引・資料目録等一〇六頁、
序・目次二二頁、東京・春秋社刊、一九七三年、定価
九、〇〇〇円)